

## 早期負荷を行ったボーンアンカーカードフルブリッジ症例について(東日本歯学会第23回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	國安 宏哉, 柿崎 税, 新井田 淳, 廣瀬 由紀人, 越智 守生, 平 博彦, 村田 勝, 北所 弘行, 草野 薫, 工藤 勝, 大桶 華子, 細川 洋一郎, 田中 力延
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	24
号	1
ページ	120
発行年	2005-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00009925/">http://id.nii.ac.jp/1145/00009925/</a>

### 早期負荷を行ったボーンアンカーダブルブリッジ症例について

○國安 宏哉<sup>\*</sup>、柿崎 税<sup>\*\*</sup>、新井田 淳<sup>\*\*</sup>、廣瀬由紀人<sup>\*\*</sup>、越智 守生<sup>\*\*</sup>、平 博彦<sup>\*\*\*\*</sup>、  
村田 勝<sup>\*\*\*\*</sup>、北所 弘行<sup>\*\*\*\*</sup>、草野 薫<sup>\*\*\*\*\*</sup>、工藤 勝<sup>\*\*\*\*\*</sup>、大桶 華子<sup>\*\*\*\*\*</sup>、  
細川洋一郎<sup>\*\*\*\*\*</sup>、田中 力延<sup>\*\*\*\*\*</sup>  
<sup>\*</sup>歯学部附属病院インプラント歯科外来、<sup>\*\*</sup>歯科補綴学第2講座、<sup>\*\*\*</sup>歯科技工部、<sup>\*\*\*\*</sup>口腔外科学第2講座、  
<sup>\*\*\*\*\*</sup>口腔外科学第1講座、<sup>\*\*\*\*\*</sup>歯科麻酔学講座、<sup>\*\*\*\*\*</sup>歯科放射線学講座

**【目的】**インプラント治療は、上部構造装着までに埋入後3～6か月の治癒、免荷期間が必要である。この長期の治癒、免荷期間はオッセオインテグレーション獲得に必要とされていたが、患者のQOLを考えるとできるだけ短期間であることが望まれる。最近では、各メーカーからも即時埋入や新しい表面性状システムの開発、早期インプラント補綴法の報告がなされており、臨床報告のデータにおいても早期負荷インプラントの結果は良好である。今回、早期の咬合機能回復のためにインプラント治療を希望する下顎総義歯患者に早期負荷インプラント治療を行ったので報告する。

**【症例】**初診時79歳の男性。上下無歯顎症例で、早期の咬合機能回

復を希望して本学インプラント歯科外来を受診した。

**【経過および考察】**16年11月17日に入院し、18日に静脈内鎮静法下で埋入手術を行った。即日に技工室にて作業用模型作製、咬合器装着、Wax up、埋没、フレームワーク鋳造まで行った。翌日19日にフレームワーク試適、ロウ付後、再度外来でフレームワーク試摘・咬合確認し、22日に上部構造を装着した。退院後、経過は良好であり、患者は非常に満足されていた。患者のQOLが向上している現在、本学インプラント歯科外来でも早期負荷症例やボーンアンカーダブルブリッジ症例が増加しており、チームアプローチ、インターディシiplinaryアプローチがますます重要になると考えられた。

### 北海道医療大学歯学部附属病院における入院症例の臨床的観察

○川上 譲治<sup>\*</sup>、柴田 考典<sup>\*</sup>、有末 眞<sup>\*\*</sup>、武藤 寿孝<sup>\*</sup>、永易 裕樹<sup>\*\*</sup>、平 博彦<sup>\*\*</sup>、村田 勝<sup>\*\*</sup>、奥村 一彦<sup>\*</sup>  
<sup>\*</sup>北海道医療大学歯学部口腔外科学第1講座、<sup>\*\*</sup>北海道医療大学歯学部口腔外科学第2講座

**【はじめに】**北海道医療大学歯学部附属病院病棟（以下、付属病院病棟）は1980年6月2日に24床の使用が開始され、2005年に札幌市あいの里での北海道医療大学病院の開院に伴い、病棟は同病院への移転が決定している。そこで、これまでの24年間における付属病院病棟入院患者の臨床統計的観察を行ったので報告した。

**【方法】**調査は各年度の病院概況報告書をもとに、付属病院病棟開設から2004年3月末日まで入院患者数、病床稼働率、1人平均在院日数、総計ないし患者1人あたりの入院収入などについて臨床統計的に調査した。

**【結果】**入院患者総数は2,850例、年間あたりの最高は1999年の203例最低は初年度の49例、平均入院患者数は118.8例であり、年を追うごとに増加傾向を示していた。一方、病床稼働率では年間あたりの最高は1986年の23.8%、最低は1981年の10.9%、平均病床稼働率は18.2%であり、年を追うごとに低下傾向を示していた。また、患

者1人あたりの平均在院日数では年間あたりの最高は1984年の25.6日、最低は2003年の6.4日で、平均在院日数は15.1日であり、年を追うごとに短縮傾向を示し、特に2002年以降が著しく減少していた。年間の入院総収入は2000年に最高を、1980年に最低を示していたが、明らかな漸増傾向を示していた。なお、患者1日あたりの平均収入は、1999年に最高を、1983年に最低を、その差は約3倍近い比率を示し、明らかな増加傾向であった。

**【おわりに】**入院患者の病院収入に対する割合が大きくなっているため、入院患者を重視していく施策が望まれる。そこで、入院患者の利便性の向上を図ることにより、入院患者や全身麻酔下の口腔外科手術および歯科治療件数の増加を目指すとともに、病床稼働率の向上、平均在院日数の短縮、高密度治療を心がけて行く必要がある。

### 乳歯萌出障害を生じさせた複雑性歯牙腫

○藤井 茂仁<sup>\*\*\*\*</sup>、細川洋一郎<sup>\*\*</sup>、金子 昌幸<sup>\*\*</sup>、松嶋 宏篤<sup>\*\*\*</sup>、大内 知之<sup>\*\*\*\*</sup>、  
賀来 亨<sup>\*\*\*\*</sup>、高橋 陽夫<sup>\*\*\*\*\*</sup>、矢嶋 俊彦<sup>\*\*\*\*</sup>  
<sup>\*</sup>医療法人ルミエール歯科、<sup>\*\*</sup>北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座、<sup>\*\*\*</sup>北海道医療大学歯学部口腔解剖学第一講座  
<sup>\*\*\*\*</sup>北海道医療大学歯学部口腔病理学講座、<sup>\*\*\*\*\*</sup>大分大学医学部歯科口腔外科

**【目的】**歯牙腫は、その発生部位が歯の発育部位と重なるため、歯の萌出障害を引き起こすことが多く、また、エックス線写真によって偶然発見されることも多い。我々は、萌出障害の乳歯保存のため開窓手術を行い、5年経過観察後、歯牙腫を摘出した症例を経験したので、その概要をエックス線所見を中心に報告する。

#### 【症例】

患者：女兒  
年齢：初診時2歳0カ月  
主訴：上顎左側乳中切歯萌出遅延  
既往歴、家族歴：特記事項なし